

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

オーストラリア・アボリジニの現在

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5797

オーストラリア・アボリジニの現在

アボリジニの起源

「国際先住民年」である今年、オーストラリア大陸の先住民であるアボリジニに対する関心が高まっている。彼らは、濃褐色の皮膚、黒い波状の頭髪、多毛、眼窩上の隆起、広鼻、大きな口、小さな顔面角などの特徴的な形質を持ち、オーストラロイド（人種）と呼ばれる。古人骨の発掘例は大陸南部のものが多く、マンゴ湖の人骨（ニューサウスウェールズ州）の3万年前、アパー・スワン河遺跡（西オーストラリア州）の3.8万年前などが古い。そのため、約5万年前、海面水位が低下した氷河期に、東南アジア方面から島伝いに簡便な舟や筏に乗って大陸北岸に渡来し、海岸沿いに移動して南部の湿潤地域から大陸内部に浸透していったと考えられる。

現在のアボリジニ

1788年、イギリスの植民地化によって白人との接触が始まった。それ以前は、約30万人が多様な環境に適応して500以上の部族と言語集団を作り、狩猟採集生活を送っていた。しかし、接触がもたらした伝染病、阿片、生活環境の劣化、白人による殺戮などにより人口は激減、1921年には約6万人となり、絶滅が予測されるに至った。その後の政府の保護政策などにより、現在は約23万人に回復したが、オーストラリア総人口の約1.4%に過ぎない。

現在でも伝統的な狩猟採集文化を残しているのは、白人の入植が遅れた中央砂漠地域や北部のアーネムランドの大保護区など、ノーザンテリトリー準州等に住む約2万人に過ぎず、アボリジニ人口の約80%は東部の都市地域で生活している。最近邦訳が出版されたサリー・モーガン著『マイプレイス』に描かれているように、アボリジニの出身を隠して生きる都市混血アボリジニも数多く、

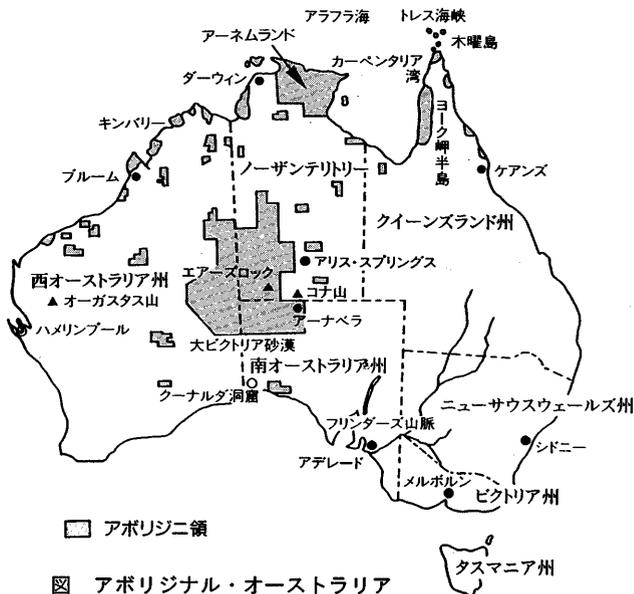


図 アボリジナル・オーストラリア

「オーストラリア・アボリジニ 狩人と精霊の五万年」
(産経新聞大阪本社刊)より

未だ根強い差別や偏見にさらされて社会の下層に
いるのが、大多数のアボリジニの現実である。

先住民への差別意識が残るその一方で、オーストラリア建国200年にあたる1988年頃から、白人たちの間に、宗主国イギリス（オーストラリアはエリザベス女王を君主に戴く立憲君主国である）からの離脱を模索する機運が広まり、その中でオーストラリアのアイデンティティの一つとして、アボリジニ文化への注目が強まってきた。

アボリジニにとっては侵略200年に他ならない建国200年は、都市に住む混血アボリジニの民族意識を高めるきっかけとなった。混血と混住が進んで形質的にも文化的にも白人に近くなってしまった自分達のアイデンティティを取り戻そうと、伝統文化を学ぶためにアーネムランドを訪れるなど、彼らは先住民の子孫であることに誇りを持ち始めた。その中で、伝統文化や白人文化とは異なる第三の文化、いうならば「都市アボリジニ文化」が生まれつつあり、絵画やダンスなど芸術の分野で注目を集めている。

簡素な物質文化

都市アボリジニが憧憬する伝統文化は、狩猟採集という生業スタイルによって特徴付けられる。私が調査したアーネムランドの生活ぶりを述べてみよう。彼らの生活は定住性が弱く、一定の領域内で血縁者を中心とする30～40人のバンドと呼ばれる集団を作り、狩猟、採集、漁労などを行っている。カンガルーやポッサムなどの有袋類、ゴアナやカメなどの爬虫類、鳥類、魚類、貝類、堅果類、種子、根茎類などを環境に応じて広く食用にする。基本的には、男が狩猟や漁労、女が採集を分担する。食料獲得は主に男が担っていたと考えられがちであるが、実際には女の採集活動の方が定期的に栄養価の大部分を提供していた。

狩猟具としてはやりやブーメランが用いられたが、世界の他の地域と異なり、弓矢は使われなかった。狩猟や採集の生産性を高めるために、森林に火を放つ習慣がある。漁労については、釣り具、魚網、ヤスやモリなどを用いる狩猟的な漁法の他に、梁（ヤナ）や笠（ウケ）を用いる漁法も地域によって発達している。

移動性の高い生活スタイルを維持するために生活用具の点数を抑えるなど、物質文化は至って簡素である。用具類も手近の素材から作り出し、また、ブーメランをシャベルや木槌としても多目的に用いる、といった工夫の才に富む点は、資源浪費型の西欧文化に対するアンチテーゼといえる。

とはいうものの、現在でもこうした生活スタイルが固守されているわけではない。政府の保護政策によって町への集住が促進され、貨幣経済も浸透しているため、狩猟採集はマーケットで購買する食料を補佐するに過ぎない。その方法も、銃、四輪駆動車、モーターボートを用い、無線電話で連絡しつつ獲物を追う近代的なものに変わっている。伝統的狩猟技術も忘れられつつあり、若者にどう伝承するかが論議されるほどである。

豊かな精神文化

簡素であった物質文化はこのように変容しつつ

あるが、豊かな精神文化は、現在でも伝統的アボリジニ文化のバックボーンを成す。彼らの精神世界を理解する鍵は「ドリミング」の概念である。

アボリジニの神話によれば、世界の全ては精霊たちによって創造された。この創世期をアボリジニはドリームの世界と呼ぶ。精霊たちは旅をしつつ先々で土地を作り、大小様々なグループに、狩猟採集の技術や儀礼の方法、法律、文化を教え、土地を与えたので、それぞれのグループの神聖な祖先と見なされる。精霊たちは変幻自在で、ワニやスイレンなど、その地域に見られる動植物、星、雷などの自然物の姿に変身してそれらの祖先となった。特定集団に結びついて信仰の対象となる動植物や事物はトーテムと呼ばれるが、アボリジニ各グループの祖先である精霊もトーテムといえる。

ドリームの世界の後、精霊たちは姿を見せることはなくなったが、今でも夢を通して人間にメッセージを送り続けているという。夢を見ることは、精霊たちとのチャネリングなのである。夢の中で対話できる精霊、およびそれにまつわる物語がドリミングと呼ばれるのは、この理由による。

精霊たちには、広い地域に共通な超越的カミも居れば、特定グループに結びつくトーテムもある。前者の代表は、オーストラリア全域で伝承されている「虹ヘビ」である。黒雲を起し雨を降らせ、雨上がりの空で虹の姿を装う。このように、虹ヘビは雨や水源と結び付けられ、それがもたらす豊饒・自然の創造力を象徴すると同時に、洪水などの強大な破壊力をも象徴し、恵みと厄災の両義性を持つ。虹ヘビはまた、死と再生をも象徴する。このような訳で、虹ヘビは豊饒儀礼、成人儀礼、葬礼などで祭られる主要なカミである。

アボリジニ神話は祖先精霊たちの活躍や事件を語り、動植物の起源、文化の起源を説明する。神話の舞台となった土地は、その精霊をトーテムとするクラン（氏族）にとっての聖地である。ドリーム時代の出来事は、儀礼で歌や踊りによって再演され、木皮画などの芸術で再現される。こうして、祖先精霊たちの偉業を讃えると同時に、それらの力を解き放ち、クランの繁栄、食料となる

動植物の豊饒を願う。アボリジニ社会における儀式、芸能、芸術はすべて、精霊の超能力を呼び出すための儀礼的意味を持つ一体の行為なのである。

各クランの神話、歌、踊り、儀式の用具、絵画のデザインは、トーテムたる精霊から代々傳承されたものであるから、クランに固有であり、アイデンティティと強く結びついている。様々な芸術作品は祖先の力の物理的な「啓示」であると同時に、その作者の土地に対する所有権の表明でもあるから、神話に関係する芸術作品を制作できるのは年長男性に限られる。しかし、貨幣経済の浸透とともに、作品が土産物や美術品として市場で取引されるようになり、男性の許可の下、芸術商品の制作には女性も参画するようになってきた。

複雑な親族組織

アボリジニ伝統文化のもう一つの特徴は、民族学者が「親族組織王国の怪物」と呼ぶほど複雑な親族組織である。まず、すべての人間は半族と呼ばれるグループに二分される。子供は父親と同じ半族に属し、女子は自分の属するのとは異なる半族の男性と結婚する。すなわち、子供が父親側の親族に属する点で「父系制」であり、半族間で婚姻をかわすので「外婚制」である。それぞれの半族には複数のクランが存在する。各クランは、固有の言語、祖先精霊、神話、儀式、芸術を持つ。

婚姻規則は、「母方交叉イトコ婚」（ある男は自分の母親の兄弟の娘と結婚する）を基本としたものである。まず、各クランは系譜的世代と呼ばれるグループに分けられる。2グループに分けるセクション制、4グループに分けるサブセクション制が存在する。半族の区分も含めると、セクション制では四つ、サブセクション制では八つのグループがあり、それらの間での婚姻規則が定められている。世代の呼称、親族呼称、婚姻が許される組み合わせ規則などは、地域によって異なり、民族学者によって分類されている。極めて整然としたこれらの規則も、繰り返し適用すれば人口が減少する恐れがある。婚姻規則は「たてまえ」であり、完全に守られているわけではないようだ。

人権と土地権の回復運動

白人の入植以降、アボリジニのたどった歴史は悲惨なものであった。開拓の障害となるアボリジニは追い払われ、抵抗すれば殺戮された。アボリジニは「粗野、野蛮、無道徳」であり、人間よりも害獣に近い存在とみなされた。ゴールドラッシュが始まった1860年代にアボリジニは急減し、それを見た白人側は保護区を設定してアボリジニを隔離し、安らかな絶滅に至らしめようと考えた。

しかし、20世紀に入って、キリスト教会が教化活動を始め、保護区の悲惨さを訴えるようになった。第2次世界大戦を経て、国際社会からの非難を受けた政府は「同化政策」へと方針転換する。それまでの保護・隔離政策の時代に比べ、アボリジニは一定の自由を得たが、それは自文化を捨て、白人文化への帰依を条件としたものであった。

1960年代中頃から、異議申し立ての世界的潮流と連動して人権回復や土地権運動が盛んになり、それを受けた1967年の国民投票でようやくアボリジニはオーストラリア市民権を得た。アーネムランドでは、町での集住政策に対抗し、クランの聖地へ帰って村を作る「アウトステーション運動」も沸き起こった。1972年に登場した労働党政権は、対アボリジニ政策を「自己決定政策」に改め、神話に根ざすアボリジニ独特の土地観を配慮した土地所有権を認める方向に転換した。また、悪名高い「白豪主義」と決別し、「多文化主義」を標榜した。1975年に登場した保守連合政権もこの政策を引き継ぎ、1976年にはノーザンテリトリー準州のアボリジニに土地権を認める法律を制定した。

昨1992年6月、連邦最高裁判所は画期的な判決を下し、オーストラリア大陸の本来の所有者がアボリジニであることを認めた。この「マボ判決」によって、今後アボリジニの権利回復は一層進むだろう。しかし、その道は未だ険しく、互いを尊重しながら異文化の共存できる道を模索する努力が、アボリジニと白人双方に求められているのである。